友人達は留学期間を通して心の支えとなりました

ここでの生活を終えるに当たり、何が一番恋しいかと人に聞かれたことがあります。その時即座に「友人」と答えていた自分に、私自身とても驚きました。

2005年11・12月号の記事で書きましたが、思えば留学当初、私はこの地における人種的「マイノリティー」という状況から、常に孤独を感じていました。それが原因でどれくらいの涙を流したか、分かりません。しかし、9ヶ月の時を経て、最初に一番大きな問題であった「人との関わり」が、今や一番大切なものとなりました。毎週末のパーティーでは、日本語をしゃべる人がいない場合がほとんどで、よくそんな環境で生きているな、としみじみすることが度々あります。友人の多くがCal Polyの正規学生であることが、クラブ活動、イベント、ソフトボールリーグに積極的に参加し、アメリカの学生生活の一部としてたくさん挑戦してきた成果として見られると思います。

今、こうして留学に関してよく頑張ったという満足感と達成感を噛みしめていられるのは、逃げ腰になりがちな自分の姿勢に、挑戦という鞭を常にたたいてきたからだと考えます。この経験はこれから先の自分の人生に役に立つと確信しています。

帰国後の私の課題は、「日常」の中からいかに新たな発見を見出し、自分自身を挑戦の環境に置かせるか、ということです。

今まで私は自分を特別な環境におくことで、自分自身を挑戦する環境に置き、磨いてきました。この留学を決意した大きな理由に、英語力をつけたい、学生のうちに勉強をみっちりしておきたいというものがありました。私は、それらを環境の変化を利用して達成してきました。しかし、帰国後はこの留学のような、ドラマティックな環境の変化を作り出すことは難しいと思います。だからこそ、上に書いたような姿勢が大事になってくると思います。最後に、帰国後のモットーとする引用をここに載せ、結びにしたいと思います。

"Don't wait for extraordinary opportunities.
Seize common occasions and make them great."
–Orison Sweet Marsden

☆　☆　☆

この一年間、全六回の投稿をさせていただいてきましたが、私の拙い文章をお読み下さり、ありがとうございました。未熟な思考や稚拙な文章も多々あったかと思います。しかし、一年間を通して「日本で育った日本人が、アメリカでの生活を通して何をどのように感じてきたか」という視点から、一生懸命書いてきたつもりです。この雑誌を御覧の皆様はアメリカにお住みの方々が大半であると思います。そのような方々に少しでも新しい視点を提供することが出来たら、これ以上に嬉しいことはありません。

未筆になりますが、松本輝彦先生や松本康子さんには、2005年度前期に早稲田大学でのオープン講座 "Academic skills for study abroad" でお世話になって以来、留学に関するご指導だけに留まらず、人間面のご指導もして下さいました。お二人、またその御家族の方々、上記講座でお世話になった西先生、山田先生に出会えたことで、私はひとまわりもふたまわりも大きく成長したと確信しています。本当にありがとうございました。

服部　祐也
はっとり　ゆうや
早稲田大学政治経済学部３年
California Polytechnic State University
San Luis Obispo 校　留学中

編集長から一言

服部君の「アメリカ留学日記」締めくくりのエッセイです。服部君、１年間、ご苦労様でした。

先日、留学を終えた服部君と日本で話す機会がありました。彼自身もここで書いているように、この１年半で本当に成長したと思います。

その一つ目の理由は、積極性です。留学直後の壁を乗り越えて、各地を旅行したり、様々なグループに参加したり、時間を惜しんでの活躍です。第２は､好奇心です。本当に様々なことに興味･関心を抱いています。６回のエッセイを読み返してみれば、明らかです。もちろん、最初に彼自身の努力があることは当然です。これらを生かして、本当に多くのことを学んだと思います。

別れの言葉は、「これから東南アジアへ行ってきます」 がんばれ！